

## 就学前児の社会的コンピテンスと愛着表象との関連を探る試み

井森 澄江

(平成10年9月30日受理)

### A Trial to Relate Preschoolers' Social Competence to Internal Representations of Attachment

Sumie IMORI

(Received on September 30, 1998)

#### <問題と目的>

母子のアタッチメントと対人関係を検討している多くの研究は安定愛着群の乳児は不安定群の子どもに比べ、社会的で、仲間との相互交渉に関心をもち、実際に仲間に対する働きかけを多くするという事を見出ししている (Easterbrooks & Lamb<sup>1)</sup>, 1979; Pastor<sup>2)</sup>, 1981; Jacobson & Wille<sup>3)</sup>, 1986)。乳児期のアタッチメントの質と幼児期の仲間との相互作用能力の間の相関を見出ししている研究も多くある (Waters et al<sup>4)</sup>, 1979; Jacobson & Wille<sup>3)</sup>, 1986; Park & Waters<sup>5)</sup>, 1989)。10歳になった時、乳幼児期のアタッチメントが安定していた子は、不安定だった子に比べて、不安、怒りなどの否定的感情が生起するような状況において、他者を信頼して援助を求めていくことが容易であり、複数の親友を持ち、親友から愛情や援助を受ける機会に恵まれていると自覚していたという報告もある (Grossmann & Grossmann<sup>6)</sup>, 1991)。また、青年期以降の研究でも、過去のアタッチメントの質と現在の対人関係スタイルや社会的適応との間に関連性があることが報告されている (Collins & Read<sup>7)</sup>, 1990; Simpson, Rholes & Phillips<sup>8)</sup>, 1996)。このようなアタッチメントの時間的連続性には気質や環境の安定性が関連しているとする説もあるが、Bowlby<sup>9),10)</sup> (1973, 1980) はこの背景に愛着表象「アタッチメントの内的ワーキングモデル」を仮定している。内的ワーキングモデルとは「人や世界との持続的な交渉を通して形成していく世界、他者、自己そして自分にとって重要な他者との関係性に関する表

象」であり、これによって人は現在の体験を知覚、解釈し、未来を予測し、自分の行動のプランニングを行っていくという。乳幼児期はこの内的ワーキングモデル形成の最も敏感な時期ではあるが、固定期ではない。児童期においても具体的な出来事に応じて変化する。すなわち内的ワーキングモデルは、乳幼児期、児童期といった未成熟な時期に徐々に構成され、その後加齢とともに可塑性を減じ安定性を増していくと考えられるのである。

就学前期は、それまでの家庭での親を中心とした交渉から、保育園や幼稚園という仲間集団の一員になることによって、自ら様々な仲間との交渉を行っていかねばならない時期である。では、そういった交渉能力、具体的行動と子どもの中に形成されている内的ワーキングモデルはどのような関係をもつのだろうか。また、その時点での具体的体験、日常の親子関係 (アタッチメント対象に受け入れられているかなど) はどう影響するのだろうか。

本研究は行動レベルの近接から表象レベルの近接へとアタッチメントの発達に移行していく就学前期の、実際の親子関係の質と、子どもの内的ワーキングモデル (アタッチメント対象についてのモデルとそれと相補的に形成される自己についてのモデル) の関係および両者と社会的コンピテンスの関連を明らかにすることを目的としている。本報告では、親子関係のうち母子関係を取り上げる。そして子どものアタッチメントパターンを中心とした母子関係の質とアタッチメントの内的ワーキングモデル、自己イメージ、集団内での保育者や仲間に対する行動傾向、仲間から受け入れられている程度との関連を検討していく。

## ＜方 法＞

### 対 象

埼玉県内の私立幼稚園年長30名1クラス、32名1クラス計2クラス62名（男児 27名、女児 35名、年齢範囲5歳7カ月～6歳7カ月、平均6歳1カ月）。うち1名を除く61名が子どものみ参加の宿泊を伴うサマーキャンプを1997年7月に体験している。

### 手 続 き

#### 1. 担任教諭への質問紙の実施

自然場面における各児の母子関係を検討するため、また集団内での保育者や仲間に対する各児の行動傾向を評定するために担任教諭に（受け持ちの園児分）以下に示すような質問紙に回答を依頼した。実施時期は1997年11月中旬である。

#### —質問紙—

\_\_\_\_\_ちゃんについて、問いA、問いBの各質問に、また\_\_\_\_\_ちゃんのお母さん（または主たる養育者）について、問いCの各質問にお答えください。

#### 問いA. 親との分離、再会時の様子

- (1) 親と長期的に離れた時（たとえば、サマーキャンプ中）に分離不安を示したことがありますか。
1. はい（具体的にどんな状態でしたか）
  2. いいえ
  3. わからない（理由）
- (2) 親としばらく離れていて再会するような時（たとえば、行事で親子別行動した後でまた一緒になる場面、サマーキャンプのお迎えの場面など）子どもはうれしそうですか。
1. はい
  2. いいえ
  3. わからない（理由）
- (3) 親としばらく離れていて再会するような時（たとえば、行事で親子別行動した後でまた一緒になる場面、サマーキャンプのお迎えの場面など）子どもの様子は次のどれに一番近いですか。
1. 親に、リラックスして働きかける、応答するなど、温かく親密な態度を示す。
  2. 感情をおもてに出さず、親と向かい合わない。
  3. 親を求めているが、同時に怒り、攻撃、悲し

み、抵抗など親を避ける行動も示す。

4. 親の働きかけを受け入れず親を真正面から支配しようとする。親を方向付け指示したり世話をやくなど、自分が親的な役割をとり、親を支配、統制する。

#### 問いB. 園での普段の様子

- (1) 園での生活で、つぎのA～オに関して、1. ほとんどあてはまる、2. 少しあてはまる、3. あまりあてはまらない、4. ほとんどあてはまらない のうちどれが一番近いですか。
- A. 引っ込み思案である、I. 攻撃的である、U. 依存的である、E. 友達関係は良好である、O. 先生や友達と上手にコミュニケーションできる。

#### 問いC. お母さん（主たる養育者）の様子

- (1) お母さんの子どもに対する行動A～Eに関して、
1. はい 2. いいえ どちらかでお答えください。
  - A. 子どもの話をうなずきながら聞いている
  - I. 子どもの気持ちを考えずに、自分の思うとおりにさせようとすることが多い。
  - U. 子どもとあまり目をあわせない
  - E. 子どもと一緒にのとき楽しそう

#### (1) 母子関係の質の評定

親との分離に続く子どもの再会行動は、その親子関係の質を表わす最もよい指標であることが指摘されている（Main et al<sup>11)</sup>, 1985）。そして幼児期のアタッチメントの評定法として、Main & Cassidy<sup>12), 13)</sup> (1987, 88) は特に6歳児を対象とした親との分離後の再会行動のスコアリングを開発している。そこで今回の母子関係の質の評定では、サマーキャンプ中の分離不安の有無（質問紙 問いA(1)）とともに、サマーキャンプのお迎えなど再会時の様子として、たんに子どもの様子はうれしそうか（質問紙 問いA(2)）のみでなく、アタッチメントパターンが Main & Cassidy<sup>12), 13)</sup> (1987, 88) の安定型、回避型、両極型、統制型のどれに一番近いかに答えてもらうことにした（質問紙 問いA(3)1. 2. 3. 4. がそれぞれ安定型、回避型、両極型、統制型に対応している。）。ただしこのアタッチメントパターンは実際の家庭での母子観察データとの比較がなされているわけではないので、日常の母親の子どもに対する行動傾向につい

ての質問項目にも答えてもらった(質問紙 問いC)。母親の側の感受性と侵害的でないこと、子どもの側の反応性と母親を相互作用に巻き込むことが、アタッチメント形成に深く関与するとされる情緒的利用可能性を構成していると考えられる(Biringen & Robinson<sup>14)</sup>, 1991) ことから、日常の母親の子どもに対する行動傾向(質問紙 問いC)では、応答的か、侵害的か、子どもと目をあわせないか、子どもと一緒にのとき楽しそうか(問いC ア～エ)といった項目を用意した。

## (2) 集団内での対人行動の評定

集団に適応していくためには友達関係を良好に保ち、先生や友達と上手にコミュニケーションできることが必要である。その上で自ら積極的に行動していくことが望まれる。一方、友達関係のできにくい子ども、仲間から受容されない子どもの典型としては、引っ込み思案であること、攻撃的であることがあげられる(Michelson et al<sup>15)</sup>, 1983)。そこで、今回の集団内での対人行動の評定では、引っ込み思案である、攻撃的である、依存的である、友達関係は良好である、先生や友達と上手にコミュニケーションできるといった項目に関して、受け持ちの各園児が1. ほとんどあてはまる 2. 少しあてはまる 3. あまりあてはまらない 4. ほとんどあてはまらない のどれが一番近いかわせてもらった(質問紙 問いB)。

## 2. 子どもへの個別検査の実施

幼児のアタッチメントの内的ワーキングモデルと自己イメージを探るため、また仲間から受け入れられている程度を測定するために、幼稚園の園長室を借り、個別に実施した。検査者および記録者は筆者、本大学学部生、大学院生。記録用紙とテープレコーダーを用意し、検査中に記録用紙に子どもの言語的反応、情緒的反応、全体的態度について記録し、後テープレコーダーで補完した。実施期間は1997年11月上旬～下旬である。

### (3) アタッチメントの内的ワーキングモデルの推定

幼児におけるアタッチメントの内的ワーキングモデルを探る方法としてはMainら<sup>16)</sup>(Main et al., 1985)の一連の縦断研究のなかで検討された分離不安インタビュー(親子の分離場面の写真を提示し、写真の中の子どもがどのように感じ、どのように振る舞うかを問う)、家族写真に対する反応、家族画などがある。また、Cassidy<sup>16)</sup>(1988)はアタッチメント人物との関係にお

ける自己の表象を探るため人形を用いたストーリー完成手続きを用いた。Brethertonら<sup>17)</sup>(Bretherton et al., 1990)もこのストーリー完成手続きを用いている。わが国では久保田<sup>18)</sup>(1995)がC. A. T. 日本語版の一部を用いることの妥当性を検討している。

今回、幼児のアタッチメント人物との関係における内的ワーキングモデルを推定するためCassidy(1988)の手続き(これを以後<ドールストーリー法>とよぶ)を参考にして課題を用意した。

具体的には、母親と子どものねずみ人形の登場する次のa～dの4つの家庭場面(ストーリー)について実験者が人形を操作しながら子どもに話した後、子どもに続きがどうなるか話を作ってもらった。母子関係安定の反応分類基準を(「」)に示した。

a. 台所で仕事をしている母親に本を読んでと頼んだ。

(「すぐにでもすぐにでなくても本を読んでくれば」)

b. お手伝いをしていて、椅子からころげ落ちてお皿を割ってしまった。(「最終的に子どもに対する気遣いをみせれば」)

c-1. 母親に留守番を頼まれた。c-2. 母親が帰ってきた。(「留守番ができて、帰ってきた母親を迎え入れれば」)

d. 母親の傍で遊んでいたら、物が落ちてきて、頭に当たってしまった。(「心配するか、実際に処置をすれば」)

### (4) 子どものもつ自己のイメージの測定

自分が他者にどのように見られているかについてCassidy(1988)を参考に、各児に<パペットインタビュー法>を用い5つの質問を行った。また自分自身をどう見ているかについての子どもの自己イメージを検討するため、Cassidy(1988)を参考に各児に<セルフインタビュー法>を用い6つの質問を行った。

パペットインタビュー;かえるの手使い人形を使う。かえる人形パペット君は聞き取りはできるが、かえる語しか話せない。人形パペット君を操作しながら、実験者は『パペット君に』その子どもについてどう思っているかについて質問を向け、答えさせる。その後で実験者は『子どもに』パペット君はなんと言ったと思うか質問する(子どもは「他者は自分についてこう思っているだろう」と想像して答えることになる)。そして質問によってはその理由について質問する。実際の質問は次の通り。

1 「パペット君は〇〇ちゃんのことを好きですか、嫌いですか。」/子どもに「今なんて言ったかな。」/どう

してそう思っていると思う。」

- 2 「パペット君は〇〇ちゃんとお友達になりたいかな。」  
／子どもに「今なんて言ったかな。」「どうしてそう思っていると思う。」
- 3 「パペット君は〇〇ちゃんのこと大事にしたいと思ってるかな。それとも意地悪したいと思ってるかな。」  
／子どもに「今なんて言ったかな。」「どうしてそう思っていると思う。」
- 4 「パペット君、〇〇ちゃんのいいところはどんなところかな。」／子どもに「今なんて言ったかな。」
- 5 「パペット君、〇〇ちゃんの厭なところはあるかな。あるとしたらどんなところかな。」／子どもに「今なんて言ったかな。」

セルフインタビュー；「これから〇〇ちゃんについて質問しますから、思ったとおりに答えてね。」と教示し、次の質問を行う。

- 1 「〇〇ちゃんの好きなところ、いいところはどこかな。」「ほかにはないかな、いくつでもいいよ。」
- 2 「〇〇ちゃんのおくないところはどこかな。」
- 3 「〇〇ちゃんはどんな子ですか。」「ほかにはないかな、いくつでもいいよ。」
- 4 「〇〇ちゃんは大勢の友達と遊ぶのとひとりで遊ぶのとどちらがすきかな。」
- 5 「〇〇ちゃんはお友達が遊んでいるのを見たら、仲間に入っていただけますか。」
- 6 「知らない子が仲間に入れてといってきたら、〇〇ちゃんはどうしますか。」

#### (5) 仲間から受け入れられている程度の測定

各児がクラスの友達から選択されている程度を知るために<シオメトリックテスト>を行った。具体的には「このクラスで一緒に遊びたいお友達は誰ですか。名前を上げてください。」と（選択のみ、人数無制限で）たずねた。

なお、各児への提示は、<パペットインタビュー>、<ドールストーリー>、<セルフインタビュー>、<シオメトリックテスト>の順で行った。

### <結 果>

#### (1) 母子関係の質の評価

担当教諭の回答の全体的結果を母子の相互交渉に関する子どもの行動と母子の相互交渉に関する母親の行動に

分け表1-1、表1-2に示した。

表1-1 子どもの行動

	有	無	わからない*	欠損値**
分離不安	7(11.3%)	51(82.3%)	3(4.8%)	1(1.6%)
再会時の様子	はい	いいえ		欠損値**
うれしそう	61(98.4%)	0		1(1.6%)
Main & Cassidy の分類型				
安定型	55(88.7%)			
回避型	4(6.5%)			
両極型	0			
統制型	2(3.2%)			
その他**	1(1.6%)			

数値は該当する人数(全体に占める割合)

\*担任が把握出来なかったため

\*\*サマーキャンプに不参加のため

表1-2 母親の行動

	はい	いいえ
応答的(子どもの話をうなずきながら聞いている)	61(98.4%)	1(1.6%)
侵害的(子どもの気持ちを考えずに自分の思うとおりにさせようとする事が多い)	1(1.6%)	61(98.4%)
子どもとあまり目をあわせない	0	62(100%)
子どもと一緒にのとき楽しそう	61(98.4%)	1(1.6%)

数値は該当する人数(全体に占める割合)

表1-3 Main & Cassidy の分類型と他の評定との関係

	安定型	回避型	統制型	その他
子ども分離不安	6	0	1	0
母親 応答的でない	0	0	0	1
母親 侵害的	1	0	0	0
子どもという時 楽しそうでない	0	0	1	0

数値は該当する人数

子どもの行動に関して(表1-1)再会時うれしそうでない子どもは一人もいなかった。サマーキャンプではっきり分離不安を示した子どもは7名であった。またMain & Cassidy の分類による安定型は55名、回避型は4名、両極型は0名、統制型は2名、その他(サマーキャンプに不参加で母子関係の質の評価はなされなかった)1名であった。一方、母親の行動に関して(表1-2)子どもとあまり目をあわせない母親はいなかった。

非応答的な母親、侵害的な母親、子どもと一緒に時を楽しんでない母親は各々1名ずつみられた。

Main & Cassidy の分類型と子どもの行動、母親の行動との関係を表1-3に示した。安定型55名のうち、7名に母親または子どもに問題が見られた。即ち、母親行動が侵害的な「侵害型」1名、子どもが分離不安を示した「分離不安型」6名であった。また、統制型2名のうち1名は分離不安を示し、他の1名は母親が子どもといる時楽しそうでないと評定されていた。その他1名は母親行動が応答的でない「非応答型」と評価された。そこで、以後、問題のない48名のみを「安定型」、それ以外の14名を「それ以外」とよぶ。ただし、分析の必要に応じて「それ以外」はさらに「回避型」(4名)、「統制型」(2名)、「分離不安型」(6名)、「非応答型」(1名)、「侵害型」(1名)に分類する。

(2) ドールストーリーから推定されるアタッチメント人物との関係における内的ワーキングモデル

ストーリーごとの具体的反応例を以下に示した。また分類基準にしたがって安定と判定された人数とその割合をストーリーごとに表2に示した。ストーリー2においては安定に判定されない(子)あやまる-(母)許す反応が多くみられ、安定の割合が他のストーリーに比べて少ない。

ドールストーリーの反応例-

- a. 読んでくれる。/後で読んでくれる。/読んでくれないので自分で読む。
- b. 母に謝り、母許す。/母に怒られる。/母、子ねずみに「大丈夫?」と聞く。/母、子ねずみに「危ないからちょっとそっちへ行って」と言う。/子ねずみ泣く。
- c-1. 子ねずみ、一人で留守番できる。/母が何かを置いていってくれば、留守番できる。/子ねずみはひとりで泣いているか、何かをしている。/子ねずみ泣き、母と一緒にいく。/子ねずみ、おおかみに食べられる。
- c-2. 帰宅した母に「おかえりなさい」。/帰宅した母に「一人で留守番できて偉い」と褒められる。/帰宅した母、子ねずみをだっこ。/帰宅した母に「何?」と言う。
- d. 母、子ねずみに「どうしたの?」と聞く。/母、子ねずみに「大丈夫?」と聞く。/母、子ねずみの手当をする。/母、驚く。

表2 各ストーリーに対する反応の判定結果

ストーリー	安定	それ以外
a	37(59.7%)	25(40.3%)
b	7(11.3%)	55(88.7%)
c	36(58.0%)	26(42.0%)
d	37(59.7%)	25(40.3%)

数値は該当する人数(全体に占める割合)

(3) パペットインタビューによる子どもの自己イメージ各質問の反応とその反応数(人数)、割合を表3に示した。質問2以外は沈黙、わからないが20%以上を占め、特に質問4は半数が分からないと答えた。質問1, 2, 3の反応(パペットが嫌い、友達になりたくない、いじわるしたいと言ったと答えた子どもの割合が各8.1%, 1.6%, 3.2%)からみるとほとんどの子どもは不特定の他者から否定的に受け取られているというイメージはもっていない。

表3 パペットインタビュー各質問の反応とその反応数

	反応	人数	(割合%)
質問1	好き	43	(69.3%)
	嫌い	5	(8.1%)
	わからない	13	(21.0%)
	沈黙	1	(1.6%)
質問2	友達になりたい	50	(80.6%)
	友達になりたくない	1	(1.6%)
	わからない	6	(9.7%)
	沈黙	4	(6.5%)
質問3	大事にしたい	44	(71.0%)
	いじわるしたい	2	(3.2%)
	わからない	11	(17.7%)
	沈黙	3	(4.8%)
質問4	全部	1	(1.6%)
	具体的叙述	23	(37.1%)
	ない	1	(1.6%)
	わからない	31	(50.0%)
	沈黙	5	(8.1%)
質問5	その他	1	(1.6%)
	ない	38	(61.3%)
	具体的叙述	8	(12.9%)
	わからない	10	(16.1%)
	沈黙	5	(8.1%)
	その他	1	(1.6%)

(4) セルフインタビューによる子どもの自己イメージ  
各質問の反応とその反応数(人数)、割合を表4に示した。パペットインタビューに比べると沈黙は少ない。しかし質問1, 2に対しては好きな場所、嫌いな場所を答えてしまう子どもがあり、教示の仕方に問題があったと思われる。そこで分析対象から質問1, 2を除いた。また質問3の反応例を以下に示した。

—質問3の反応例—

元気な子/みんなと仲良くする/みんなと外で遊ぶ/いい子/やさしい/こわい/普通の子/可愛い/足が速い/一人で遊ぶのが多い/つまらないときも多い/人に譲ってあげる/下駄箱が混んでいたら待つ/欲しいおもちゃを我慢する/花火が上手

表4 セルフインタビュー各質問の反応とその反応数

	反応	人数	(割合%)
質問3	具体的叙述	33	(53.2%)
	わからない	19	(30.6%)
	沈黙	5	(8.1%)
	その他	5	(8.1%)
質問4	大勢	55	(88.7%)
	ひとり	7	(11.3%)
質問5	入っていける	54	(87.1%)
	入っていけない	3	(4.8%)
	わからない	5	(8.1%)
質問6	入れる	55	(88.7%)
	入れない	7	(11.3%)

#### (5) 集団内での対人行動

担当教諭の回答の全体的結果を表5に示した。

表5 対人行動の評定の全体的結果

	1ほとんど あてはまる	2少し あてはまる	3あまり あてはまらない	4ほとんど あてはまらない
ア.引っ込み思案	5(12.4%)	18(34.6%)	14(22.6%)	25(40.3%)
イ.攻撃的	2(3.2%)	8(12.9%)	14(22.6%)	38(61.3%)
ウ.依存的*	10(16.1%)	20(32.3%)	19(30.6%)	12(19.3%)
エ.友達関係良好	45(72.6%)	13(21.0%)	4(6.5%)	0
オ.コミュニケー ション上手	43(69.4%)	10(16.1%)	7(11.3%)	2(3.2%)

\*欠損値1(記入もれ)

数値は各評定段階の人数(全体に占める割合)

#### (6) ソシオメトリックテスト

ソシオメトリックテストの結果、各園児の被選択数は0~8、また相互選択数は0~4の範囲であった。選択数ごとにその人数と割合を表6に示した。

表6 ソシオメトリックテストの全体的結果

	8	7	6	5	
被選択数	1 (1.6%)	2 (3.2%)	2 (3.2%)	6 (9.7%)	
相互選択数	0	0	0	0	
被選択数	4 (14.5%)	3 (19.4%)	2 (19.4%)	1 (22.6%)	0 (22.6%)
相互選択数	1 (1.6%)	5 (8.1%)	13 (21.0%)	24 (38.7%)	19 (30.6%)

数値は各得点における人数(全体に占める割合)

#### (7) ドールストーリーによる母子関係の安定性と母子関係の質の評定との関連

表2に示したようにドールストーリーの分類基準にしたがって安定に分類されたのはストーリーa. 37名 b. 7名 c. 36名 d. 37名であった。これを、母子関係の質の評定((1)参照)の「安定型」と「それ以外」にわけて、その割合を表7に示した。

表7 母子関係の質とドールストーリーによる母子関係の安定性

	「安定型」	「それ以外」
ストーリーa.	32(68%)	5(36%)
b.	6(13%)	1(7%)
c.	28(58%)	8(57%)
d.	31(64%)	6(43%)

$\chi^2$ 検定の結果、ストーリーa. に有意な関連がみられた( $p < .05$ )。母親との再会行動を主とした母子関係の質とドールストーリーに関係が認められるということはそこに特定の内的ワーキングモデルの媒介が推測される。しかしストーリーa. 以外では母子関係の質の評定とドールストーリーの叙述にはっきりとした関連がみられなかった。

ストーリーb. では(2)でも述べたようにあやまる一許す反応が多く、教示の仕方に、またストーリーc. では「安定型」の中にも不安を示す反応、連れていってもら

う反応がみられ、分類基準に問題があると思われた。今回のドールストーリーは全体としては内的ワーキングモデルを推測するものとして妥当であるとはいえない。そこで以降、母子関係の質との関連を主に分析を行う。

(8) 母子関係の質と子どものもつ自己イメージ

母子関係の質別にパペットインタビューによる質問、セルフインタビューによる質問の反応の各反応数(人数)を割合を表8に示した。一部、複数の質問項目の反応パターンにより一つの反応項目とした。すなわちパペット

インタビュー4(いいところ)、5(わるいところ)において

いいところ-全部、わるいところ-ないを『完璧』、いいところ-叙述、わるいところ-叙述またはないを『柔軟』、いいところ-ない、わるいところ-わからないを『否定』、いいところ-わからないまたは沈黙、わるいところ-わからないまたは沈黙を『わからない』、いいところ-わからない、わるいところ-ないまたはあるを『その他』とした。

表8 母子関係の質とインタビューの反応

パペット 質問1	「安定型」	「それ以外」	回避	統制	分離不安	非応答	侵害
好き	33(68%)	10(71%)	2	2	5	1	0
わからない	12(25%)	2(14%)	1	0	0	0	1
嫌い	3(7%)	2(14%)	1	0	1	0	0
パペット 質問4、5							
完璧	0	1(7%)	0	1	0	0	0
柔軟	20(42%)	3(21%)	0	1	1	0	1
否定	0	1(7%)	1	0	0	0	0
わからない	11(23%)	4(29%)	2	0	2	0	0
その他	17(35%)	5(36%)	1	0	3	1	0
セルフ 質問4							
大勢	46(96%)	9(64%)	3	2	4	0	0
ひとり	2(4%)	5(36%)	1	0	2	1	1
セルフ 質問6							
入れる	46(96%)	9(64%)	2	1	6	0	0
入れない	2(4%)	5(36%)	2	1	0	1	1

表9 母子関係の質と対人行動

	ア. 引っこみ 思案	イ. 攻撃的	ウ. 依存的	エ. 友達関係 良好	オ. コミュニケーション 上手
「安定型」	3.0	3.5	2.5	1.2	1.3
「それ以外」	2.6	3.0	2.4	1.7	2.1
回避	2.8	2.3	1.3	1.5	1.8
統制	3.5	1.5	2.5	2.0	2.5
分離不安	2.7	3.8	3.0	1.3	1.7
非応答	2.0	3.0	3.0	3.0	4.0
侵害	1.0	4.0	4.0	3.0	4.0

数値が1に近いほど あてはまる  
数値が4に近いほど あてはまらない

表10 母子関係の質と仲間に受け入れられている程度

		「安定型」	「それ以外」	回避	統制	分離不安	非応答	侵害
相互選択数	0	16(33%)	3(21%)	0	0	2	1	0
	1	17(35%)	7(50%)	2	1	3	0	1
	2～4	15(31%)	4(29%)	2	1	1	0	0
被選択数	0(孤立児)	3(6%)	1(7%)	0	0	1	0	0
	1～4	35(73%)	12(86%)	4	2	4	1	1
	5～8(人気者)	10(21%)	1(7%)	0	0	1	0	0
	(周辺児)	13(27%)	2(14%)	0	0	1	1	0

数値に該当する人数(全体に占める割合)

(3)で述べたようにほとんどの子どもは不特定の他者から否定的に受け取られているというイメージはもっていない。しかし表8に示したパペット質問1で嫌いと言ったと答えた子ども、すなわち不特定の他者に受け入れられないという自己イメージを持つ子どもの「安定型」に占める割合は7%なのに対して、「それ以外」に占める割合は17%であった。しかし有意差はなかった。なお質問2、3において不特定の他者から否定的に受け取られているというイメージをもっていると考えられる子どもの全体数が5未満なので、質問2、3の型別分析は行わない。また、質問4と質問5の反応から判定される『否定』的でもなくかつ『完璧』でもない『柔軟』な自己イメージを持つ割合は「安定型」で42%、「それ以外」で21%であったがこれも有意差は得られなかった。

一方、セルフ質問4の大勢よりひとりであることを好む割合は「それ以外」で36%、「安定型」で4%と「それ以外」に多い傾向が示された( $p < .005$ )。また質問5の知らない子を受け入れない割合も「それ以外」で36%、「安定型」で4%と「それ以外」に多い傾向が示された( $p < .005$ )。なお「非応答型」「侵害型」は大勢よりひとりであることを好みかつ知らない子を受け入れない。「回避型」にも同様の傾向がみられる。それに対して「分離不安型」はひとりを好むが知らない子を受け入れている。

(9) 集団内での対人行動と母子関係の質の評定の関係  
母子関係の質の評定で分類された「安定型」と「それ以外」に各対人行動項目の評定の平均値を表9に示した。

t検定の結果、項目b 項目d 項目e において「安定型」と「それ以外」に有意差がみられた(項目bは $p < .05$  項目d, eは $p < .01$ )。「安定型」は「それ以外」に比べ、攻撃的でなく、仲間関係が良好で、上

手にコミュニケーションできているといえる。

#### (10) 仲間から受け入れられている程度と母子関係の質の評定

ソシオメトリックテストの結果を母子関係の質の評定で分離された「安定型」と「それ以外」別に表10に示した。孤立児、周辺児は「安定型」で14名(29%)、「それ以外」で3名(21%)、また被選択数5以上は「安定型」で10名(23%)、「それ以外」で1名(7%)であり、 $\chi^2$ 検定で有意差はみられなかった。

### <考 察>

#### 1. 母子関係の質とドールストーリー

再会時の様子から判定した母子関係の質とドールストーリーの関係において、母子関係の質が安定している子どもはストーリーa。(台所で仕事をしている親に本を読んでもと頼んだ。)で母親と子どものねずみとの関係を肯定的、受容的に語る傾向がみられた。しかし、それ以外のストーリーでは母子関係の質と明確な関連がみられなかった。Cassidy(1988)やBretherton(1990)の結果とは異なる今回の結果は、アタッチメントの内的ワーキングモデルを推定する方法としてドールストーリー法が妥当ではないことを示すものではないと思われる。すなわち結果でも述べたように今回のストーリーでは教示の仕方や、分類基準-今回6才児ということで、3才児を対象としたBrethertonらの同種のストーリー-完成課題とは異なる分類基準を設けた一に問題があった。またストーリーのなかに自分を投影させるというより、物語を想起させてしまうもの(ストーリーc.留守番していると、おおかみが来てたべられてしまう など)があった。今後、幼児のアタッチメントを喚起するのにふさわしいストーリーおよびその反応分類基準をさらに検



討していく必要がある。

## 2. 母子関係の質と自己イメージ

アタッチメント人物との関係における内的ワーキングモデルと自己についてのワーキングモデルとは相補的に形成されると考えられる。これを検討するためにはドールストーリーとインタビューの関連を分析する必要があるが、今回のドールストーリーはアタッチメントの内的ワーキングモデルを推定するのにあまり適切ではなかったと考えられる。そこで母子関係の質との関係からインタビューの結果をみた。

全体的自己イメージに関しては総じてわからないと答える子どもが多く、母子関係の質とに明確な関連はみられなかった。これには表象レベルへの移行期であることが関係しているのかもしれない。また、わからないと答える子どもが多かったのは日本人の特徴をすでに反映しているとも考えられるし、教示の問題があるのかもしれない。今後、縦断的研究で検討する必要がある。

対人的自己イメージに関しては母子関係の質が不安定な子どもは安定的な子どもに比べて非社会的、非受容的である傾向がみられ、インタビューと母子関係の質とにある程度の関連が示された。これは対人的自己イメージの方が答えやすい(二者択一)形式だったため、わからないという答えがなく、全体的自己イメージのように統計的に有意差がでにくいという制約がなかったためとも考えられるし、全体的自己イメージより表象しやすい。または自己についてのワーキングモデルのなかで、はやくに形成される(可塑性を持つとはいえ)ためなのかもしれない。単純に、対人的自己イメージのほうが母子関係の対人パターンが反映しやすいとも考えられる。

## 3. 母子関係の質と社会的コンピテンス

行動傾向に関しては、引っ込み思案である、依存的であるには母子関係の質が安定か不安定かで差はなかったが、それ以外では有意な差がみられた。欧米でなされてきた社会的スキルの研究では引っ込み思案は問題行動であるが、日本では従来、肯定的に評価されてきた概念である。また、依存的という概念も対人的行動として肯定的側面を持つ。この二項目以外で母子関係の質の違いで有意差がみられたことは両者に深い関連があることを示していると考えられる。今回分析できなかったアタッチメントの内的ワーキングモデルとの関連については今後の研究で検討していく。

なお、行動傾向の結果から、母子関係の質の細分類で

「分離不安型」とした子どもは Main & Cassidy(1987)の両極型(この型とされた子どもはいなかった)に近いのではないかと思われた。幼児期における日本人の両極型については必ずしも Main & Cassidy(1987)の分類と一致しないのかもしれない。

仲間から受け入れられている程度に関しては母子関係の質との間に関連が示されなかった。これに関しては父親との関係が関連していることを示唆する研究もあり、母親以外との関連を調べる必要がある。また仲間経験、仲間との類似性などを検討する必要があると思われる。

### <要 約>

今回のアタッチメント対象についての内的ワーキングモデルの推定に用いたドールストーリーには、いくつかの問題があり、それと相補的に形成されると考えられる自己イメージ、および社会的コンピテンスとの関係を充分検討することはできなかった。しかし、日常の行動評定による母子のアタッチメントの質と自己イメージに関しては、対人的自己イメージにおいて、ある程度の関連が示された。社会的コンピテンスとの関係に関しても、行動傾向において多くの関連がみられた。一方、仲間から受け入れられている程度に関しては母子関係の質との間に関連は示されなかった。これに関しては父子関係や仲間経験、仲間との類似性などを検討する必要があると思われた。

### <謝 辞>

1. 本研究ではM幼稚園の園長先生、理事長先生、主任先生を始め諸先生のご協力を得ました。お忙しい中、多くのご助言をいただきました園長先生、理事長先生、主任先生、多数の質問項目にお答えくださいました諸先生、そして沢山のことを教えてくれた園児の皆様感謝いたします。
2. 子どもへの個別検査に使用した用具の作製、資料の整理等を手伝ってくださいました大井京子、皆川貴代諸氏のご協力を感謝します。また個別検査の検査者、記録者としてお手伝いくださった本学大学院生、学生の皆さんに感謝します。

### <引用文献>

- 1) M.A.Easterbrook & M.Lamb(1979) The relationship between quality of infant-mother

- attachment and infant competence in initial encounter with peers. *Child Development*, 50, 380
- 2) D.L.Pastor(1981) The quality of mother-infant attachment and its relationship to toddlers initial sociability with peers. *Development Psychology*, 17(3), 326
- 3) J.Jacobson & D.E.Wille(1986) The influence of attachment pattern on developmental changes in peer interaction from the toddler to the preschool period. *Child Development*, 57, 338
- 4) E.Waters, J.Wippman & L.A.Sroufe(1979) Attachment positive affect and competence in the peer group: Two studies in construct validation. *Child Development*, 50, 821
- 5) K.Park & K.Waters,E.(1989) Security of attachment and preschool friendship. *Child Development*, 60, 1076
- 6) K.E.Grossmann & K.Grossmann(1991) Attachment quality as an organizer of emotional and behavioral responses in a longitudinal perspective. In C.M.Parkes, J.Stevenson-Hinde & P.Marris(Eds) *Attachment across the life cycle*. Routledge.
- 7) N.L.Collins & S.J.Read(1990) Adult attachment, working models, and relationships quality in dating couples. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 644
- 8) J.A.Simpson, W.S.Rholes & D.Phillips (1996) Conflict in close relationships: An Attachment perspective. *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, 899
- 9) J.Bowlby(1977/1991) 黒田実郎、吉田恒子、横浜恵三子(訳) 母子関係の理論Ⅱ：分離不安 岩崎学術出版社  
[J.Bowlby(1973)*Attachment and Loss*, Vol.2 :*Separation*. London: Hogarth]
- 10) J.Bowlby(1981/1992) 黒田実郎、吉田恒子、横浜恵三子(訳) 母子関係の理論Ⅱ：対象喪失 岩崎学術出版社  
[J.Bowlby(1973)*Attachment and Loss*, Vol.3 :*Loss, Sadness and Depression*. London: Hogarth]
- 11) M.Main, N.Caplan & J.Cassidy(1985)Security in infancy, childhood and adulthood:A move to the level of representation. In I.Bretherton & E.Waters(Eds) *Growing Points of Attachment Theory and Research, Monograph of The Society for Research in Child Development*, 50, (1-2).] Serial No.209
- 12) M.Main & J.Cassidy(1987) Reunion-based classification of child-parent attachment organization at six-years of age. Unpublished scoring manual, University of California, Berkeley.
- 13) M.Main & J.Cassidy(1988) Categories of response to reunion with the parent at age 6: Predictable from infant attachment classifications and stable over a 1-month period. *Developmental Psychology*, 24, 415
- 14) Z.Biringen & J.L.Robinson(1991) Emotional availability:A reconceptualization for research. *American Journal of Orthopsychiatr*, 61, 258
- 15) L.Michelson, D.P.Sugai, R.P.Wood & A.E.Kazdin(1987) 高山徹、佐藤正二、佐藤容子、園田順一(訳) 子どもの対人行動 岩崎学術版  
[Michelson,L., Sugai, D.P.,Wood, R.P.& Kazdin, A.E.(1983) *Social Skills Assessment and Training with children*. Plenum.]
- 16) J.Cassidy(1988) Child-mother attachment and the self in six-year-olds. *Child Development*, 59, 121
- 17) I.Bretherton, D.Ridgeway & J.Cassidy(1990) Assessing internal working models of the attachment relationship: An attachment story completion task for 3-year-olds. In M.T.Greenberg, D.Cicchetti & E.M.Cummings (Eds) *Attachment in the Preschool Years*. pp.273-308 Chicago: University of Chicago Press.
- 18) 久保田まり 1995 アタッチメントの研究 川島書店 pp.217-234.